

平成27年7月教育委員会定例会（2日目）会議録

平成27年7月24日 開催

静岡市教育委員会

平成27年7月静岡市教育委員会定例会2日目次第

1 日時

平成27年7月24日（金） 午後2時

2 場所

静岡市役所 清水庁舎 3階 第1会議室

3 日程

(1) 開会

(2) 会議録署名人の決定

(3) 議案

議案第18号 平成28年度使用静岡市立の中学校用教科用図書の採択について
(国語・書写・地理・歴史・公民・地図・数学)

議案第19号 平成28年度使用静岡市立の高等学校用教科用図書の採択について

(4) 報告

報告第3号 静岡市立小学校及び中学校の通学区域の変更に関する諮問について

報告第4号 全国学力・学習状況調査の結果等の公表について

(5) 閉会

平成27年7月教育委員会定例会会議録

- 1 日 時 平成27年7月24日（金） 午後2時開会
- 2 場 所 静岡市役所 清水庁舎 3階 第1会議室
- 3 出席者 教育委員 委員長 佐野 嘉則 委 員 伊藤嘉奈子
委 員 伊澤 三郎 委 員 高野 康代
委 員 橋本ひろ子 教育長 高木 雅宏

事務局

教育局長	池谷 眞樹
教育局次長	森下 靖
教育部参与	山田 欣也
参与兼教育総務課長	高津 祐志
教育総務課教育力向上政策担当課長	市川 靖剛
教職員課長	月見里茂希
教育施設課長	妻木 明仁
学校教育課長	小林 文人
参与兼学事課長	廣瀬 陽
参与兼学校給食課長	森下 修一
教育センター所長	瀧浪 泰
中央図書館長	矢澤 嘉章
教育総務課調整係長	小林以津子
教育総務課主査	宇佐美亜希

4 日 程

(1) 開会

佐野委員長 ただいまから、平成27年7月静岡市教育委員会定例会を開催いたします。本会は、2日間にわたって開催するもので、22日に引き続き、本日は2日目となります。

本日は、会場後方に傍聴の方が34名、入場されております。傍聴人の定員については、静岡市教育委員会傍聴規則第2条に、「定員は6人とする。」と規定されております。しかし、本日はそれを上回る数の希望者がお見えになりました。

そこで、同規則同条のただし書「委員長が必要があると認めるときは、会議の場所、その他の事情を考慮して、その定員を増員することができる。」という規定を適用し、会議を円滑に運営するための環境などを考慮した上で、本日は定員を27人に増員するものとして、御入室いただいているものです。

教育委員、事務局職員ともに、御承知おきください。

(2) 会議録署名人の決定

佐野委員長 本日の会議録署名人を伊澤委員に指定

(3) 議案

佐野委員長 それでは、議事に入ります。

お手元の資料「会議の流れ」をごらんください。本日は、議案2件について、御審議をお願いいたします。また、2件報告があるということです。

<議案第18号 平成28年度使用静岡市立の中学校用教科用図書の採択について（国語・書写・地理・歴史・公民・地図・数学）>

佐野委員長 それでは、審議に入ります。

まず、議案第18号「平成28年度使用静岡市立の中学校用教科用図書の採択について」です。静岡市立の中学校用教科書は全15種目ありますが、一昨日の22日に開催した7月定例会の1日目の会議において、「理科・音楽一般・音楽器楽合奏・美術・保健体育・技術・家庭・英語」の8種目の採択を行いました。

本日は、「国語・書写・地理・歴史・公民・地図・数学」の7種目に

ついて審議します。

22日にも申し上げたとおり、本議案には、静岡地区教科用図書選定委員会が、教科ごとに、原則として、2者の採択候補者を選定した建議案が示されますが、採択の対象となる教科書は、平成28年度用に発行される予定の文部科学省検定済の中学校教科書全てとなります。我々教育委員は、その全ての教科書の送付を受け、学習指導要領や静岡地区教科書研究委員会の研究報告書などの資料と合わせて、1冊1冊について研究をし、本日の審議に臨んでおります。

本日の審議ですが、22日と同様に、教科ごとに事務局からの議案説明を受け、委員同士での協議、事務局への質疑をした後、静岡市教育委員会会議規則第14条第2項の規定により、無記名投票で採決を行いたいと思います。

投票の結果、過半数の票を得る教科書がある場合は、その教科書を採択いたします。2者が半数ずつ、つまり、3票ずつの票を得た場合ですが、平成26年6月20日に公布された地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律附則第2条第2項の規定により、静岡市教育委員会の会議の議事については、同法による改正前の第13条第3項が適用されます。改正前の第13条第3項には、「同数の場合は、委員長の決するところによる」と規定されておりますので、2者が3票ずつの票を得た場合は、私が決します。また、過半数の票を得る教科書がなく、2者が半数ずつの票を得ることもない場合には、再度、投票を行うこととなります。再投票に先立って、再度、協議し、予備投票を行うことにより、再投票の対象とする2者を選定することとしたいと思います。

いかがでしょうか。

各 委 員 異議なし。

佐野委員長 皆様に御承認いただきましたので、ただいま、申し上げた方法で採決するものといたします。

なお、公平性を期すため、開票は教育局長にお願いいたします。

では、事務局から、議案について御説明をお願いいたします。

学校教育課長 教科書採択に関しましては、平成27年度教育委員会4月定例会において、平成28年度使用静岡市立の中学校用教科用図書の採択基本方針を決定し、基本方針に沿って、教育委員会は、教育関係者と保護者の代表で構成する静岡地区教科用図書選定委員会を設置しました。

そして、静岡地区教科用図書選定委員会は、必要な調査研究を、校長と教員の代表で構成する静岡地区教科書研究委員会に委嘱しました。

委嘱を受けた静岡地区教科書研究委員会は、各教科の調査研究の観点を作成した上で調査研究を行い、その結果を静岡地区教科用図書選定委

員会に報告しました。

静岡地区教科用図書選定委員会は、静岡地区教科書研究委員会からの報告を踏まえ、教科ごとに、教育委員会への建議案を策定し、この定例会に建議したところでございます。

また、各教育委員の皆様も、別途、全ての採択候補者の教科用図書見本をお手元に置いて、各自、御研究を進めてきていただいたところでございます。

本日は、この建議案を参考に、教科ごと、全ての採択候補者の中から、1者採択に向けて、御審議いただきます。教科ごとの建議案については、静岡地区教科用図書選定委員会の委員長を務めました山田教育局参与から御説明いたします。

よろしく願いいたします。

選定委員長 まず、全ての教科を通してですが、第2回、第3回の静岡地区教科用図書選定委員会にて、調査研究委員会から、各発行者の特徴について、報告を受けました。その後、質疑、協議を行い、議案のとおり、本地区における建議案をお示ししました。

それでは、各種目の建議案について、説明いたします。

国語についてですが、国語の採択対象教科書は5者です。各者ともに、話す・聞く、書く、読む能力が確実に身につくよう、教材や言語活動が工夫されているという報告がありました。選定委員会における協議では、静岡市の課題である、読み取る力、家庭学習、読書活動等について話題に上がりました。協議の中心は、三省堂と光村図書出版となりました。

三省堂は、3年間を通して、コミュニケーションを扱った内容が載っており、プレゼンや即興劇など、今どきの内容になっているという意見が出されました。

光村図書出版は、題材が学校の活動に沿ってつくられていて、子どもたちが考えやすい、また、家庭での読書にもつながるのではといった意見が出されました。情報量のバランスもよく、子どもたちに見通しを持たせる仕立てになっているという意見が出されました。

協議の結果、三省堂、光村図書出版を建議案としました。

佐野委員長 選考委員会からの原則2者の建議をいただきましたが、文部科学省からの平成28年度使用教科書の選択についての通知にありますように、私ども教育委員は、全ての教科書からの選考が原則であることを踏まえて判断していくことをお伝えしておきます。

それでは、国語につきまして、質問、御意見等ありますでしょうか。

高木教育長 国語科ですが、採択対象の5者全ての教科書が、子どもにとって見やすく、また、学ぶ分野も多い中で、よく考えて編集されており、とても

感心する内容でした。本当に、甲乙つけがたい、まずは、そのような感想を持ちました。

選定委員会でも、諸々の検討を経て、2者の建議をしています。私も、その2者について、十分、読み込みをしましたので、感想を言わせていただきたいと思います。

まず、三省堂ですが、それぞれの単元のまとめのところに、「学びの道しるべ」という項目があります。三省堂の1年生の教科書の16ページを開けてください。「朝のリレー」という谷川俊太郎さんの詩から、「学びの道しるべ」として、このような学習を展開しましょう、このような学び方をすると読みが深まりますよ、という記載がされている編集内容です。同じように、42ページ、63ページと、一つずつの単元の中で、このような学びをしていきましょうという学習の指針が示されています。これは、読みやすいと思いました。また、子どもにとっても、学びやすい編集であると感心しました。これが、三省堂の教科書についての感想です。

もう1者、光村図書出版についても、少しお話をします。私も、小学校を中心として現場に行ったときに考えたのですが、国語は、どうしても、読み物文が中心になって、読者の気持ちになること、また、この物語は何を訴えたいのだろうという主題に迫るように読むことが中心になりますが、光村図書出版の1年生の教科書の239ページからは、文法が特筆されています。中学生になって、子どもたちは、文法を改めて学ばなければなりません、まとめて文法、さらには、漢字に親しもうという内容の項目を設ける編集になっていることに感心しました。

私も、建議された2者を中心として、選定をする方向で考えたいと思っています。

橋本委員

私の意見も、教育長の意見と似ている部分があります。国語は、どうしても、こんな力がついたよ、こんな力をつけなくてはいけないよ、ということが曖昧になりがちな教科だと思えます。それに真っ向から取り組み、この単位ではこのような言葉の力をつけるように、と踏み込んでいるのが光村図書出版と三省堂ではないかと思いました。

まず、光村図書出版も三省堂も、最初は似ています。光村図書出版の1年生の教科書8ページと三省堂の1年生の教科書の6ページを見てください。このように、この教材、この単元で、このような力をつけなければいけないのだ、ということについて、教師と子どもがともに見通しを持って取り組み、最終的に力がついたことを確認することができる仕立てになっていることは、この2者の特筆すべき特徴だと思います。これがあるかないかでは、とても大きな違いがあります。国語の学力調査が話題になりましたが、ここの力がついたね、という実感が持てるような授業にしていくためには、このような仕立てが大変優れていると思

います。

ただ、両方とも、迫り方が少し違うように思うので、比べていただきたいのですが、例えば、書くところ、光村図書出版では9ページ、三省堂では7ページなのですが、同じ「書く」でも、ぱっと見ていただいて、教材数が随分違うのですね。三省堂は、少ない教材にじっくり取り組んで、きちんと力をつけていこうという姿勢が感じられます。それに対して、光村図書出版は、ところどころに練習という部分を挟んで、いろいろな部分で積みかけてといえますか、繰り返し、いろいろな力を子どもたちが身に付けていく、バリエーションを求めているように感じます。迫り方が対照的だと思います。静岡市の子どもにとっては、いろいろな場面で練習を重ねながら、できるようになったね、という形がよいのか、じっくりと、きちんと、丁寧に指導して、力を付けていく方がよいのかというところが、少し考えどころかなと思っています

比較して、分かりやすいところを紹介しますが、光村図書出版の1年生の教科書117ページに、案内文を書くという単元があります。これは練習という扱いで、わかりやすい案内文を書くということで、1ページの扱いになっています。対照的なのが、三省堂の教科書の91ページからです。ここでは、同じく案内リーフレットを書くのですが、91ページから、きちんと、まず、素材を集めるよ、構成をつくるよ、という形で丁寧に指導をして、最終的に、自分でやってみようというところが95ページに載っています。このように、構成の在り方の差があるので、きちんと力をつけていくためには、どちらがよいのかということを考えながら、私は投票したいと思っています。

高野委員

私も、光村図書出版と三省堂が建議が上がってきたということで、その2者を中心に見ました。先ほど、教育長から、「学びの道しるべ」という、どのような学習をするのかについてのヒント、あるいは、ポイントのようなものについて、お話がありましたが、私も、同じ題材、教材を扱っているところで比較してみました。

小説の学習方法についてのことですが、光村図書出版の1年生の教科書の202ページから、ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」を取り上げています。三省堂の教科書では、152ページから、やはり同じ題材を取り上げています。文章が長いものですから、三省堂の教科書には、先ほど、教育長がおっしゃった「学びの道しるべ」が163ページに、その前の2ページに作者紹介や漢字が載っていて、164ページにも、その語り手ということで、「読み方を学ぼう」という別のコーナーがあり、それぞれがつながっています。一方、光村図書出版のほうは、202ページから小説が載っていますが、216ページに、この小説を読むときの目標、確認しよう、読みを深めようという課題や問いを投げかけるような記載があり、その前に漢字が載っています。三省堂はコンパクトにまと

められていて、光村図書出版は丁寧であるという印象を受けました。どちらがよいかということは、教員の授業の仕方や指導方法にも関わるのかもしれませんが、例えば、経験の浅い教員が使うときには、このように、いくつも問いがある方が、いろいろな側面から考えることを促されるので、よいのではないかと思います。

そして、日本の古典の取り上げ方についても同じ題材を取り扱っているところを比較しました。光村図書出版の2年生の教科書では、132ページから平家物語を取り上げています。原文が載っているのですが、134ページから、原文が少し字体を変えて書かれています。このことは、きめ細かな配慮であると思いました。三省堂の2年生の教科書では、同じように、108ページから平家物語を取り上げています。三省堂の方は年表が載っていて、歴史と関連して、どの時代の作品かということが分かるようになっていて、良い工夫だと思いました。

それから、もう一点、学年ごとの振り返りの仕方やまとめ方を比較しました。これも、両者とも、非常に工夫しており、子どもの興味を引くような振り返り方、まとめ方をしています。光村図書出版では、1年生は230ページからポスターセッション、2年生は228ページから学習報告書、3年生は学びについて語り合うというテーマで振り返り、まとめをしています。三省堂は、1年生は208ページからグループ新聞、2年生は地域情報誌、3年生は名言集で振り返り、まとめをしています。三省堂は、まとめ方にバリエーションが感じられて、子どもの興味を引くという点では、非常に良いのではないかと思います。一方、光村図書出版は、一つ一つの振り返り方、まとめ方の説明がとても丁寧にされているという印象を持ちました。

そして、光村図書出版では、一部のページで、二段組になっているレイアウトがありました。例えば、1年生の教科書の80ページ、教科書以外の読書ということで、「世界で一番の贈り物」が載っていますが、ここは二段組になっています。2年生、3年生の教科書でもそれぞれ2箇所ほど載っていたと思います。高瀬舟など小説類なのですが、こういうところでもレイアウトを工夫して、教科書以外の読書に慣れさせるという趣旨なのだろうと思いながら、読ませていただきました。

伊藤委員

私も、やはり、今回の採択対象教科書の中では、光村図書出版と三省堂がよいのではないかと思います、両方を比較して読みました。高野委員の比較と重ならない部分での比較についてお話しします。

三省堂の1年生の教科書の44ページ、それから、光村図書出版の1年生の教科書128ページですが、選定委員会でも、静岡の子どもたちの場合、書くことに課題がある、書くことが大変なようだという御意見がありました。今、申し上げたページには、レポートを書くこと、調べたことを書いてみよう、報告してみよう、という同じテーマが取り

上げられていましたので、比較してみました。

三省堂の45ページには、課題を決めるときにシートを用意して、自分の気になることをいろいろ書き出して選ぶという図が載っており、言葉だけではなく、目で見ることができます。課題を決める一つの作業にしても、このように具体的にシートなどを用意して、どのような手順で進めていくのかということが分かりやすいと感じました。光村図書出版は、129ページに説明がありますが、「1 報告する課題を決めよう」というように言葉で説明をしています。国語の教科書ですから、やはり言葉で説明するということだと思いますが、このように、説明の仕方が、三省堂と光村図書出版では違っています。他のページでもそうなのですが、三省堂46ページ、47ページや、光村図書出版の129ページ以降をめぐっていただくと、三省堂の方が、図などを使って、視覚に訴えて、分かりやすく説明をしようとされているのに対して、光村図書出版は、国語の教科書ということもあるのかもしれませんが、言葉で説明をしようしていると感じました。

同じようなことが、三省堂の1年生の教科書166ページ、光村図書出版の1年生の教科書の180ページの鑑賞文を書くというテーマについても言えます。三省堂は、168ページで、カードを使って書くという説明がビジュアル的になされています。それに対して、光村図書出版も、そのような表が182ページに載っていますが、基本的に言葉で説明をしています。そのように、教科書のつくりが若干違うように感じました。

それから、巻末に資料がありますが、三省堂の資料がとてもおもしろいし、優れているように感じました。三省堂の1年生の教科書260ページ以降で、「考える広場」というものがあります。学ぶ力を高めようということで、どのように物事を考えていくのか、メモを活用する、アンケートを使うなど、ものを考えるときのいろいろな方法が非常に詳しく書かれています。それは、国語の学習だけではなく、他の教科にも利用できますし、物事をどのように考えていくのだろう、自分でどのように意見をまとめていくのだろう、どういう感想を述べるのだろうということについて、方法論として、このような形で記載されているのは、とても分かりやすく良いと思いました。

私個人の印象としては、三省堂の方は、説明や図なども多く用いていて、かなり実践的、実用的な感じがする教科書だと思いました。それに対して、光村図書出版は、伝統的な国語の教科書らしい国語の教科書という印象を持ちました。

伊澤委員

冒頭で選定委員会での検討についての説明にもあったように、国語の場合は、「読む・書く」、そして、家庭学習が大事だと思います。建議された2者については、具体的に言うと切りがないほど、それぞれの良さがあると思います。両者とも評価したいと思います。

私が、もう一点検討したのが古文の学習に入るタイミングについてですが、それぞれ違っていると思いました。三省堂は、1年生の教科書の100ページに、月を思う心というイントロから、すぐに竹取物語に入っていくという形で、伊藤委員からお話があったように、ビジュアルもあり、子どもにとっては、興味深く入っていける内容になっていると思いました。それに対して、光村図書出版は、2年生の教科書に出てくる枕草子が古文の学習の始めのように思いました。そのような違いは、多少あると思いました。

佐野委員長 私からも一言、申し上げたいと思いますが、まず、国語については、どの教科書も、ほとんど遜色ないほど、指導要領に沿って作成された完成度の高いものが多く、単元の立て方も各者工夫されており、言語活動について、かなり力点が置かれている印象があります。

建議に挙げられた三省堂と光村図書出版を主に見ましたが、私は、まず、ふだんの読書活動につながる教科書がよいのではないかという観点で検討しました。つまり、読んでいて楽しめる、そして、他の本も読みたくなる気持ちを持つことができるものがよいと思いました。そういう意味では、どちらもよいのですが、三省堂の方が、小学校から中学校へ上がってきたときに、読みやすい文章で、挿絵も多くて、取っ付きやすい構成になっていると感じました。また、両者とも、文法の解説がなされているのですが、やはり、若干、光村図書出版のほうが固く、しかも、詳しく書かれているという印象を受けました。そして、コミュニケーションとしてきちんとした正確な意味合いを相手に伝えること、そのために必要な語彙力をいかに養っていくかということも、国語の一つのテーマであると思いますが、そういった意味では、光村図書出版は、「情熱」と「熱情」という言葉がある中で、どうして「情熱」という言葉を使ったのかということを取り上げるなどして、語彙力を身に付けるような仕組みが、よくできているという印象を受けました。

では、決議をとらせていただきます。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果が出たようですので、報告をお願いします。

教育局長 開票結果を報告させていただきます。株式会社三省堂2票、光村図書出版株式会社4票です。

佐野委員長 国語につきましては、光村図書出版株式会社が過半数の4票を得ましたので、光村図書出版株式会社を採択いたします。

続いて、書写に移ります。

選定委員長 書写の採択対象教科書は5者です。協議の中心は、教育出版、光村図書出版となりました。各者とも、特徴があります。

教育出版は、毛筆の字の中心線がはっきりして、字のバランスが取りやすく、生徒への配慮が見られました。特集「文化と歴史に触れる」というものですが、充実していて、日本古来の文化に興味を持てるよう工夫されているという意見が出されました。

光村図書出版は、生徒がおもしろい、書き表してみたいと思える題材を扱っていて、資料としての役割が大きく、コラムも良いのではという意見が出されました。

最終的に、身の回りのことに興味や関心を持って、日常生活に役立てることのできる教科書は、光村図書出版と教育出版なのではないか、という結論となりました。

協議の結果、教育出版、光村図書出版の2者を建議いたします。

高木教育長 まず、選定委員長に質問したいと思いますが、書写の教科書には、お手本のように長く引き出すページがありますが、このページは、実際の授業ではどのように使われているのかについて、選定委員会では意見や感想がありましたか。

選定委員長 選定委員会では、教育長が示されたものについての意見や感想は出ていませんが、正月に行う書初めのときに、多く利用するページだと考えています。

高木教育長 要するに、活用されているということですね。

選定委員長 はい。

高木教育長 私の感想ですが、この5者を見て、教育出版の編集が心に残っています。例えば、教育出版の教科書の44ページ、45ページを見てもらうと分かるのですが、朱の筆で、筆圧というのか、筆の力の込め方、使い方等がよく分かるように書かれています。私も、書写が大好きなので、書を書く時がありますが、力の入れ方、抜き方、それから、払いの仕方、とても分かりやすいです。子どもたちにとって、とても参考になるのではないかと強く思い、心に残りました。

橋本委員 私は、教育出版、光村図書出版ともに良いと思いましたが、光村図書出版の良いと思った点、印象に残った点があります。まず、部分別行書部首一覧というものがあります。行書にしても、このなべぶただけ見ても違うことが分かる一覧です。これは、いろいろな場面で、とても使い

勝手の良い資料になっていると思います。それから、行書、楷書と、それぞれにお手本を示しながら、使うことができるようになっていますが、2年生が学ぶ46ページで、楷書と行書の使い分けを特筆して扱っています。このような場面で、楷書がふさわしいのか、行書がふさわしいのかということ子どもたちが考えながら選択して使うことができるようになるためには、非常に良い扱いをしていると思いました。

それぞれ、光村図書出版も教育出版も、教材のバリエーションは、POPから、祝儀袋から、本当に日常生活に生きることを多く扱っていると思っています。特に、宅急便の送り状を扱っていることは、大変、今日的といいますか、使える書写ということを意識して構成されていることを感じました。

伊藤委員

今は、パソコンの時代になっています。子どもたちは、まだ、パソコンで字を書くということが多くないかもしれませんが、私たち大人は、あまり自分で字を書かなくなってしまうように思います。ですから、子どもたちには、字を書く楽しさやいろいろな字を書くことができるということを感じてもらいたいと、書写の教科書を見て、思いました。

そのような観点で申しますと、私は、あまりお習字をする機会がなかったもので、そのことはよく分かりませんでした。多様な字を書く、いろいろな種類の字が書けるという点から考えると、教育出版の方が、いろいろな筆記用語が紹介されており、それぞれの見本のところに、これはどんな筆記用具で書きましたというマークが付いているなど、字を書くことが楽しくなるような編集になっていると思いました。そのようなところは、教育出版が創意工夫されていると感じました。

高野委員

書写の実際の授業は実技が中心になるとと思いますが、私は、習い始めるときに、子どもたちが関心を持つことができるのは、どちらだろうかと考えました。

例えば、教育出版の方は、まず、目的に合わせて書こうということが見開きで載っていて、字というもの、字を書くということで、こんな活用の方法があるということが一覧で分かります。それと、各学年の冒頭のところに工夫があるように思いました。例えば、1年生は、金子みすゞの詩から始まっています。2年生は、66ページですが、あの人が残した文字ということで、一休宗純、樋口一葉などの書を紹介して、それから、行書の勉強につなげているように思いました。そこで、子どもたちの関心とか興味が高まって、学びに入りやすいのではないかと思います。

それと、先ほど教育長が示された行書の書き方の見本のことですが、光村図書出版の教科書の23ページにもあります。私は、行書の醍醐味というほどには書が書けないのですが、ダイナミックに書くというイメージが伝わってくるのは教育出版の方ではないかと思いました。

佐野委員長 私も、教育出版と光村図書出版のいずれかが良いと考えました。そして、読んでいて、デザインや文字の歴史を探るなど、書くこと以外にも、いろいろ学ぶことができ、書くことに興味を持つことができるのはどちらだろうかと考えました。個人的には、光村図書出版の方が、読んでいておもしろいといえますか、例えば、52ページのデザインと文字です。教育出版の方も同じように取り上げているのですが、光村図書出版の方が読んでいて、おもしろいと感じました。ですから、文字を書く楽しみだけではなく、その文字を通じてデザインを意識するなど発展的な学びにつながるように興味を持つことができるのは、どちらかという、光村図書出版の方ではないかと思いました。

教育出版の方は、文字を書くことに専念して、きれいな字をどのようなコツで書くのかという実習的なものの傾向が強いと感じました。

それでは、採決に移らせていただきます。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果の報告をお願いします。

教育局長 報告させていただきます。
教育出版株式会社 3 票、光村図書出版株式会社 3 票でございます。

佐野委員長 2 者が半数ずつ、3 票ずつの票を得ました。初めに御説明しましたように、平成26年度 6 月20日に公布された地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律、附則第 2 条第 2 項の規定により、静岡市教育委員会の会議の議事については、同法による改正前の第13条第 3 項が適用されております。改正前の第13条第 3 項には、「同数の場合は委員長の決するところによる。」と規定されておりますので、2 者が 3 票ずつの票を得た場合は、私が決することとなっております。書写は、光村図書出版株式会社を採択します。

佐野委員長 続きまして、社会です。まず、地理からお願いします。

選定委員会 地理の採択対象教科書は 4 者です。協議の中心は、東京書籍、帝国書院となりました。地理では、資料を比べたり、関連づけたりしながら学習していくための工夫が各者ともに見られました。

その中で特に話題に上がったのは、東京書籍です。静岡市が、18 ページにわたって取り上げられていることや、防災についての調査など、深い学習につながるものが評価されました。また、小学校からのつな

がりが分かるように表紙の絵が工夫されており、子どもたちが勉強しようという意欲を持ちやすいという意見が出されました。

帝国書院は、巻末に見開きがあることや、写真が鮮やかで良いという意見が出されました。また、世界に興味を湧く資料が充実していることが評価されました。

協議の結果、東京書籍、帝国書院を建議いたします。

高木教育長 地理は採択対象教科書4者のうち、選定委員会は、東京書籍と帝国書院の2者を建議するという事です。4者とも、ビジュアル的にも、子どもたちに考えさせる、子どもたちを引きつけるという関心度が高いものだと思っています。編集の力というのは大したものだと本当に感心します。

焦点は、東京書籍の巻末、私たちの地域の教材です。選定委員長から話があったとおり、身近な地域の調査というところで、多くのページを割いて静岡市が掲載されているというところを、どう我々が評価するかだと思います。静岡市が盛り込まれているからといって、選定することに直結するわけではないと思いますが、少なくとも、全国に発信できる大きな要素です。この取り上げ方を、地元である本市がどのように確認するのは、大事な事だと思います。インパクトは大きいということは確かです。

高野委員 私も、実は、その最後の身近な地域の調査というところに静岡市を扱っていることをどのように考えたらいいのか、悩ましいと思っています。

他の視点からの検討ですが、地理ですので、地図の活用方法や地図を含めた資料の読み取り方などについて考えてみました。

まず、いろいろな資料の読み取り方についての説明が多いと思ったのは、帝国書院です。帝国書院の最初の方に目次がありますが、「技能を磨く」というところで、統計資料の使い方などから、新旧の地形図の比較まで、非常にコラム的にいろいろな地理を学ぶ上で必要な技能が、丁寧に記載されています。

それから、東京書籍の方でも、「地理スキルアップ」ということで16項目の統計資料の読み方とか地図の見方などについてのアドバイスが載っています。先ほどの帝国書院は25項目でしたので、種類としては帝国書院の方が多いかと思います。

それと、地図の活用方法ですが、どちらの教科書にも「世界各地の人々の生活と環境」という章があります。帝国書院でいうと18ページからですが、このタイトルの上に、熱帯林の水田で農作業する人の写真があり、その下にケッペン原図という地図が載っています。そこに、世界の中の、この地域の分布といいますか、熱帯の分布ということで、世界の中の位置付けというのがここで確認できます。次のページは、アラビア

半島での暮らし、生活、乾燥した地域の暮らしということで、同じ地図が載っています。このように、この章では同じ地図で位置を示しています。統一的なレイアウトに統一された地図が載っていますので、同じように考えることができるのではないかと思います。東京書籍の方も、レイアウトは同じなのですが、地図は載っていませんでした。地理の教科書ということから考えると、帝国書院が優れていると思いました。教育出版も帝国書院と同じ地図を用いていました。

それから、基本的な地図については、全体的に、帝国書院の方がシンプルで、東京書籍の方は、いろいろな書き込みがされていると思いました。例えば、東京書籍の45ページですが、これはアジアの地図ですが、パンダが載っていたり、シベリア鉄道が載っていたり、子どもが知っているものを載せて、関心を引いているのではないかと思います。一方、帝国書院の方は、そういうものはなくてシンプルな地図でした。ただ、例えば、日本の地理を勉強するときに、中部を見ると、帝国書院の211ページですが、山と平野部分と川などが一目でわかる地図が掲載されています。日本の地理を勉強する時、全ての地方にこのタイプの地図が載せられています。帝国書院の方が、地図のバリエーションは、あると思いました。そして、もう一つ、帝国書院が優れていると思ったのは、記述の仕方なのですが、例えば、帝国書院の36ページ、アジアのところを見ると、書き出しが「ユーラシア大陸の広い範囲を占めるアジア」となっています。アジアの世界の中の位置とか、あるいはその広さをイメージすることのできる書き出しだと思いました。212ページの日本の中部地方の説明も、そのような言い回しになっていると思います。他の教科書は、ユーラシア大陸には触れなくて、アジアの説明に入っています。地理ということから考えると、世界の中の位置や広さをイメージできる書きぶりがおもしろいと思いました。

そして、帝国書院の方は、一つのページの中に、関連ページの誘導が多いので、いろいろ広く掘り下げることができるのではないかと思います。例えば、帝国書院の40ページに中国の記述があるのですが、高齢化というところにページ数が入っていて、そのページを見ると、日本の少子高齢化のことが分かるページに進むというつくりになっていて、仕立て方もよいのではないかと思います。

一方、東京書籍で良いと思ったのは、先ほどのアジアのところ、先ほどと矛盾する言い方になってしまいますが、それぞれの地域を勉強するときに、46ページでは、まず、「アジア州を眺めて」ということで、全体を自然環境、文化、それから都市化というキーワードで捉えて、それから、それぞれの地域とか国の各論的な話に入っています。まず、そのアジア州全体の特徴を捉えて、それぞれの国に入るつくりは、全体像を大まかに把握させるというところでは、東京書籍の捉え方も、非常に良いのではないかと思います。東京書籍は、先ほど教育長がおっしゃ

った静岡市の身近な地域の調査にページ数を費やしていますので、それをどう考えるかということです。一方、帝国書院の方では、266ページから275ページで、やはり、練馬区をテーマに身近な地域の調査を取り上げています。266ページなのですが、最初に、身近な地域の調査のテーマを決めようと流れが出ていることは良いと思いました。その隣の267ページには、テーマを決めるヒントが、いろいろな視点ということで示されています。そのテーマ決定のヒントは、仮に練馬区でないとしても、応用ができるのではないかと思いますので、私も決めかねているところです。もちろん、静岡市が載っているからというだけで選ぶではありませんが、一つの要素としては考えなければならぬと思います。ただ、先ほど申し上げたことから考えると、私は、帝国書院の方が地理の教科書らしいと思いました。

橋本委員 私は、一つ、東京書籍で魅力的だと思っているところをお話ししたいと思います。

東京書籍の4ページの目次を見ると、「調査の達人」というコーナーがあります。ウェビング・マップをつくらうとか、主題をつくらうとか、レポートをつくらうというもので、いわゆるアクティブラーニングです。自分たちの地域や身の回りのことについて、課題を持って、自分たちで調べていくことについて、非常に多くのことがヒントとして載っています。自由研究にもつながるようなつくりになっていて、これが、自分たちで調べようという投げかけをしているとすると、それに対応して、静岡市のことが載っていると、考えることと実際に行動してみることが結びつきやすいように思います。静岡市が載っているからということではなく、子どもたちが、自分たちの足で、自分たちの頭で、自分たちの地域を考える、それから、県を考える、世界を考えるということについてのスタートになると考えると、優れた部分だと思いました。

伊藤委員 先ほど、高野委員がアジアのところの比較についてお話されましたが、私も、最初に出てくる地域がアジアでしたので、東京書籍と帝国書院を比較してみました。帝国書院の36ページ、東京書籍の46ページです。

帝国書院は、他の地域についてもそうだったのですが、高野委員がおっしゃったように、まず、全体を把握するところから入ります。その帝国書院の全体の把握の仕方ですが、36ページの「ユーラシア大陸の広い範囲を占めるアジア」という説明の文言に、地形の説明がありますが、すぐ左上にある地図と文章を対比する形で確認することができます。文章に出てきたヒマラヤ山脈は地図のここにあるよね、というように、地図と文章を見ながら、アジアの地形、川や平野や山脈などを全体的に押さえられるようになっています。国の名前や半島の名前も、この地図と文章を見ながら、分かりやすいよ

うに帝国書院の教科書は構成されています。

一方、東京書籍は、上の地図と下の文章が必ずしも対比されていません。もちろん、対比されているところもありますが、載っている文章と地図だけで全ての説明ができるようにはなっていませんので、地図と文章の結びつき、特に、それぞれ地域の最初の説明については、帝国書院の方がうまくつくっていると思いました。

それから、静岡市を取り上げているかどうかについて、どのように考えるのかは、私も、非常に悩ましいと感じました。もちろん、子どもたちからすれば、静岡市が載っている教科書は、とても嬉しいことだろうと思いますが、嬉しいだけで終わってはいけません。身近な地域の調査ということですので、これを基に調査するとき、静岡市のことが載っていると、かえって、これに引っ張られてしまのではないかと、いい部分と悪い部分、いい面と悪い面があるのではないかと感じました。

他方、帝国書院の方は、全く違う地域について、いろいろな視点からの調査について示しているの、実際に身近な地域を調査するときは、一步退いて、客観的な目で冷静に静岡市を見ることができるとも思いませんでした。ですから、子どもたちの目から見たときに、どちらがいいのかは、甲乙つけがたいと感じました。

伊澤委員 伊藤委員が最後におっしゃった静岡市の地域の調査については、申し訳ない言い方になりますが、教員の導き方によっては、子どもたちもかなり迷う部分もあるのではないかと思います。ただ、地域を身をもって知るということを考える中で、シチズンシップ教育につながるような学習になるのなら、18ページは圧倒的な紙面の量ですので、すごいことだと私は思います。

もう1点ですが、この後の歴史や公民の話につながることもないかもしれませんが、4者とも、日本の領域や領土について、かなり詳しく書かれるようになったように思います。これまでは、地理の教科書では、そんなに詳しく書かれていなかったと思います。これについては、4者とも、見開きを使って書くような形になってきたのではないかと思います。

高木委員長 我々が考えるべき大きな観点の一つとして、長期採択という観点があります。特に、社会科については、今まで、長期採択の傾向がありました。長期だから良い、悪い、という結論になるものではありませんが、今現在、子どもたちが学習している内容も含めて、長期採択についても分析しながら検討するという観点を委員の皆さんには持っていただきたいと思っています。

佐野委員長 他に意見、御質問がないようでしたら、採決に移ります。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果の報告をお願いします。

教育局長 開票結果ですが、東京書籍株式会社3票、株式会社帝国書院3票となっております。

佐野委員長 それでは、先ほども御説明しましたとおり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律、附則第2条第2項の規定により、静岡市教育委員会の会議の議事については、同法による改正前の第13条第3項が適用されます。改正前の第13条第3項には、「同数の場合は委員長の決するところによる。」と規定されています。2者が3票ずつの票を得たため、私が決することといたします。株式会社帝国書院を採択します。

続きまして、歴史に移ります。

選定委員長 歴史の採択対象教科書は8者あります。建議案は、東京書籍、帝国書院となりました。協議は、歴史を点として捉えるのではなく、時代と時代のつながりや流れの中で認識することの大切さを中心に行いました。

委員の意見の中では、東京書籍については、生徒の視点に立っている点や、歴史年表の流れ図が革新的で完成度が高いことが挙げられました。また、日本を学んでいるとき、東アジア、欧米の状況をしっかりと押さえていて、歴史の流れを切る内容のない内容になっているという意見が出されました。

帝国書院は、章の始めの「タイムトラベル」で、生徒に視覚からの情報が入り、時代の特徴をつかみ、問題意識を持たせているのが特徴的で、イラストは時代背景などいろいろなことを考えることができ、楽しいという意見が出されました。

教育出版は、人物エピソードや見出しが良いという意見や、見出し文もよいが、勉強していく中で、生徒に問題意識を持たせる点が良いといった意見が出されました。

協議の結果、東京書籍、帝国書院の2者を建議します。

伊澤委員 社会科については、地理、歴史、公民というつながりの中で、新しい考え方を持っても良いのではないかと考えています。

今、選定委員長から説明があったとおり、選定委員会での協議は、帝国書院と東京書籍を中心にされたものでした。東京書籍は、説明にあったように、年表のつながり又は日本の歴史を学ぶ中での東アジアなど世

界の歴史とのつながりなど、全体的にとっても評価されるものだと、私も思います。また、帝国書院は、「タイムトラベル」の絵などが分かりやすく、それぞれがいろいろな観点の中で評価されるものだと思います。

選定委員会の中では、協議されなかったのですが、私は、育鵬社のいくつかの点を評価したいと思っています。特に、教科ごとの調査研究の観点の「(1)内容」についての評価になりますが、まず、1点目は、歴史を築いた人物の記述が詳細で、とても多いということです。人物の索引を見ると、437人ほどの索引があります。他者の教科書については、おおよそ350人から380人ほどでした。その中でも、私は、育鵬社の139ページに二宮尊徳が載っていることを評価したいと思います。報徳の教えを築いてくれた二宮尊徳、他者の教科書にはこのような人物の記載がありません。もう一点ですが、巻頭に歴史絵巻の「鳥の目」というものがあり、その中で、その時代の特徴がしっかり表されています。それが、次のページの「虫の目」というところの各文章にうまくつながっていると思います。また、育鵬社の教科書の50ページですが、神話について、見開きで、「神話に見るわが国誕生の物語」という記載があり、視点を広げています。51ページには、日本サッカー協会のロゴマークになっているヤタガラスについての表記もあり、これは、子どもたちの興味を引くものだと思います。そして、その1からその5までありますが、「なでしこ日本史」という形で、歴史上で活躍した女性の記載がかなり取り上げられているように思いました。最後の方のページには、今までと違った近現代史の取り上げ方がされていると思います。

そのような点から、私は、育鵬社も皆さんに協議していただいた方がよいのではないかと思います。

高木教育長 私も、建議された東京書籍、帝国書院はもとより、育鵬社についても、議論するという場を持たなければいけないと感じています。当然、いろいろな感じ方があると思いますので、これを最終的に選ぶかどうかは、委員の皆さんそれぞれの判断ですが、建議になかったものでも協議することは大切なことであると思います。順番に、私の感想を伝えたいと思います。

まず、東京書籍です。さすがに、東京書籍は、磐石といたしますが、いろいろな分野において、歴史の流れ、そこにおける登場人物、そして、それに波及する出来事などが上手に編集されていると思いました。会社の総力を挙げて編集をされているものだろうということで、建議案の一つとなるのは間違いなく感じています。

次に、帝国書院ですが、東京書籍に劣らず、上手に編集されています。特に、見開きで、図柄が差し込まれているところは、その時代を考えさせるビジュアル的な面での要素として子どもたちの関心を引き、どうしてこのような生活様式なのだろうという当時の時代を顧みることがで

きるようになっていくことがとても意味があることだと思います。さらに、一つ一つの単元の中に、「確認しよう」「説明しよう」というところがあります。学習が流れていかないように、きちっと押さえをすることは、確かな力を身に付けるためには、とても大事なことです。全ての章に、この「確認しよう」「説明しよう」という立ち止まる場を設けているのは、帝国書院の見事なところだと思います。

最後に、育鵬社について、評価をしたいと思っていますが、伊澤委員が言われたとおり、育鵬社の顕著な編集の特徴は、人物を中心としてなされている点だと思います。それぞれの時代の人物が盛り込まれていて、なぜ、その人物がこのように歴史に残るのかという観点で、人物の表れから、その時代を探るつくりになっています。これも、とても意味のある編集だと思います。

特に、教科の調査研究の観点の(3)生徒の発達段階の配慮の中の「受け継がれてきた伝統や文化への関心や意欲を高めるために、身近な歴史、地域の歴史に目を向けることができるように工夫されている」かどうかということから考えると、人物から学習に入ることも、大事なことであると思います。表記の仕方や時代認識は、それぞれの者によって違いますので、そのことを評価するつもりはありませんが、よく編集されていると思います。さらに、伊澤委員が言われましたが、女性史、主だった活躍された女性たちを、それぞれ取り上げて、1、2ページに盛り込まれており、我が国の女性像もすごいということを感じます。そういう意味で、幅広く、建議された教科書以外にも、検討する視点も必要ではないかと思います。

伊藤委員 先ほどから、育鵬社の教科書についてお話されています。皆さんの注目もありますし、私たちも、一生懸命研究しなければいけないと思いましたので、私も、もちろん、東京書籍や帝国書院などの教科書もきちんと見ましたが、育鵬社の教科書についても、改めて比較をする意味で見させていただきました。

歴史って何だろうと考えると、これは私個人の意見ですが、例えば、歴史の中で政治の流れはどうだったのか、それから、歴史の中で経済がどのように動いてきたか、あるいは、歴史の中で庶民がどのように暮らしてきたのだろうかなど、いろいろな階層の、いろいろな視点の歴史があると思います。育鵬社の教科書は、人を中心とし、政治的なことや日本を中心にもものを見るという視点がありますので、他の教科書に比べて、経済がどうなっていたのだろうか、世界の中でどうなっていたのだろうかという視点は、他の教科書よりも薄くなっているのではないかと感じました。現在はグローバル化の時代ですので、世界的な視点で日本の歴史を学ぶということは、とても大事なことだと思っています。

例えば、帝国書院の巻頭の3ページを見てください。各者、このよう

な巻頭を設けて、どのような視点で歴史の教科書をつくっているかということを説明しているのです。どの教科書の巻頭も、とても参考になりましたが、帝国書院は、グローバル化ということを非常に意識しています。実は、日本の歴史は、昔から世界とのかかわりの中にあっただという視点、ずっと昔から中国や韓国や朝鮮などいろいろな国から影響を受けつつ、こちらからも影響を与えつつ成り立ってきたのだという視点で、一貫して編集がされているところは、この帝国書院が最も優れていると思いました。そのような視点での記述がとても詳しくされていました。また、どの教科書にも歴史年表が付いていますが、帝国書院は巻末に歴史年表がついています。この歴史年表の中で、帝国書院は、真ん中に日本と海外の交流という欄を一つ設けており、日本史と世界史がお互いにどのように関係し合っているのかということが、年表の中で一見して分かるようになっていて、日本史と世界史のつながりが非常に見やすいと思いました。世界史を勉強する中で、これは日本史とどのような関係があるのだろうかというところや、日本史の勉強をする中で、そのとき、世界はどうだったのだろうかというところが、分からなくなってしまうときがあると思いますが、そのようなときに、帝国書院のような年表のつくり方や教科書の本文中で非常に丁寧に書かれていることは良いと思いました。細かいことですが、例として、帝国書院の68ページに室町時代の勘合貿易の話があります。次の69ページの上から4行目のところに、「この勘合貿易、日明貿易によって幕府には莫大な富がもたらされました、15世紀になるとこのような大きな利益を得ました」、というように記載があり、貿易でこのようにお金が儲かったということまで経済史的な観点ではっきり書いてあります。東京書籍の80ページでも、同じく日明貿易について、「この日明貿易によって、日本の経済や文化は大きな影響を受けました」と記載されています。世界とのつながりを考えるとどうしてもお金の問題が出て来ますので、そこまで踏み込んで詳しく書いてある帝国書院の方が、経済史的な視点でもはっきり書いてあっておもしろいと個人的には思いました。

高野委員

私も、東京書籍、帝国書院、育鵬社の3者を中心に見ました。それで、先ほどから話題になっている人物の取り上げ方ですが、私も索引の人物の数を数えましたが、伊澤委員がおっしゃるように、育鵬社が人数としては、大変多かったです。ただ、その取り上げ方なのですが、東京書籍と帝国書院は少し似ていて、その人物から、その時代や社会について視野が広がるようにレイアウトが工夫されていると思いました。

例えば、信長と秀吉というところで見ますと、東京書籍の106ページと107ページで、二人を対比させるような形で、信長の説明の方には、長篠の合戦、樂市令が書かれていて、秀吉の方はバテレン追放令が書いてあります。そのような形で対比させて、その時代のそれぞれの業績や

歴史上の位置付けなども分かるような形のレイアウトにされていると思いました。帝国書院も、94ページで、それと少し似たようなレイアウトになっています。育鵬社については、信長についても、秀吉についても、かなりページ数を費やしていますので、全部を読むと、それぞれの特徴が分かるという書きぶりになっていたと思います。

人物の取り上げ方ということで別の例を挙げますが、帝国書院の225ページに、ドイツのユダヤ人を助けたという杉原千畝のことが載っていますが、同じ囲みの中に、平和という枠組みで、アンネ・フランクのことが載っています。そうすると、アンネ・フランクはユダヤ人ですので、この囲みを見ると、その二人が直接の関連は無かったとしても、この時代のこと、あるいは、ナチスのことなどをイメージすることができるのではないかと思います。東京書籍123ページも、大変似ているのですが、「歴史にアクセス」というところで、杉原千畝とアンネの日記を並べて挙げてあります。一目見て、この時代が何となく理解できるレイアウトの工夫があると思いました。育鵬社についても、それを探したのですが、233ページに杉原千畝のことが取り上げられています。東京書籍や帝国書院と少し違うのは、杉原千畝に協力した方なののでしょうか、一緒にユダヤ人を助けた樋口季一郎のことが取り上げてあります。アンネ・フランクは、見開きの左下に書いています。東京書籍と帝国書院には、人物の取り上げ方のレイアウトについて、人物だけではなくて、その時代や社会の理解に視野が広がるような工夫があると思いました。

ただ、育鵬社の「人物クローズアップ」のように、その人の生き方や人間としての魅力を中心に記述するほうが、子どもたちの興味は引きやすいのかもしれませんが、しかし、歴史の学習としては、歴史上の位置付けを意識することは必要だと思いますし、人物の評価につながる記述は極力避けた方がいいのではないかと、私は思いました。

そして、先ほど伊藤委員もおっしゃった年表ですが、確かに、世界と日本とのつながりを書いてある帝国書院の巻末の年表が良いと思いました。帝国書院については、巻末の年表以外に、例えば、帝国書院の61ページですが、随所に小年表が出てきます。61ページの小年表は法然、栄西、親鸞と鎌倉仏教のことですが、86ページの小年表にはこの時代のヨーロッパのことが書いてあって、左側にそれが日本のどの時代に当たるかということが書いてあります。このように、随所に小年表が出てきて理解がしやすい、世界と日本とのつながりなども理解ができるのではないかと思います。

それから、帝国書院は、先ほどの地理の時も、地図がとても良いというお話をしたのですが、歴史の教科書に載っている地図も、世界の中の日本の位置や関係が分かるように、非常に工夫されていると私は感じました。例えば、帝国書院の13ページですが、ここに2万年前の日本列島の地図が載っています。アラスカやシベリアまで含んで、なおかつ、

日本の遺跡や人の移動などが分かるような地図になっています。東京書籍では、32ページに同じような地図があるのですが、日本だけになっています。また、帝国書院の35ページでの右上に、「7世紀、8世紀の東アジア」というタイトルで地図が載っているのですが、遣唐使の航路や渤海との交易と、それぞれの国の状況、さらに、都のつくり方に類似性があるということも全部盛り込んだ地図になっています。東京書籍は、49ページに11世紀の東アジアという地図が載っていますが、帝国書院の地図にあったような動きは見られないのではなかないと思いました。

そして、先ほど、経済のお話が出ましたが、帝国書院の226ページに載っている太平洋戦争についての地図の中には、真珠湾攻撃や日本がどのように進出していったのかが書いてありますが、右下の方に、アジアの国々の資源、錫やゴムなどについても書いてあります。資源の動きなど経済的なことと太平洋戦争との関連性をイメージすることができる、説明することができる、良い地図だと思いました。東京書籍は224ページ、育鵬社は235ページに同じ時代の地図がありますが、どちらも、政治的、軍事的な面が主な地図になっていますので、帝国書院の地図に盛り込まれた情報は、おもしろいと思いました。

それから、歴史の調査研究の観点(3)生徒の発達段階への配慮の「身近な地域の歴史に目を向ける工夫」という観点からも検討しました。東京書籍では、「身近なものにも歴史がと」というものが5ページにあり、「堺市の歴史を調べよう」というものが13ページからありますが、その地域の歴史を探るために、テーマの決め方から発表まで、非常にきめ細かな手法が紹介されています。また、「私たち歴史探検隊」という、地域の歴史を調べてみようというコーナーが全部で5か所ほど載っていたと思います。例えば、東京書籍の54ページを見ると、かなりきめ細かな資料の集め方、フィールドワーク的な手法、レポートの書き方など、いろいろ載っています。帝国書院は、歴史の調べ方、まとめ、発表ということで、仙台市を例に身近な歴史の調べ方を取り上げていますが、応用のきく書き方だと思いました。このあたりについては、東京書籍の書き方が一番丁寧だったと思います。育鵬社については、12ページから「地域調査に出かけてみよう」というものがあり、22ページで、新潟県立歴史博物館を訪ねて、調査、体験してみようということがありますが、さらっと書いていると思います。

先ほど、帝国書院の「タイムトラベル」の話がありましたが、東京書籍の年表についてのつくりは、選定委員会でも評価されていたとおり、私もよいと思いました。それと、帝国書院の「タイムトラベル」は、東京書籍の年表とは趣旨は違うのですが、非常にダイナミックで、おもしろいと思いました。歴史って何なのかと考えると、司馬遼太郎が、「歴史とは、それは大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこに詰められているのです。」というようなことを言ったそうですが、ま

さにそのことをこの「タイムトラベル」というのは表現しているのではないかと思いました。少し抽象的な方法になりますが、子どもたちに、歴史とは何かという本質的なところを知ってもらう、司馬遼太郎の言葉を借りて言えば、いろんな人の人生が詰め込まれたものだということを知ってもらうには、この「タイムトラベル」は非常に良いのではないかなというふうに思いました。

橋本委員

確かに、歴史とは何か、何のために歴史を勉強するかというと、こんなにたくさんの昔の人の人生が詰まっているということを通して、子どもたちが、今の自分の立ち位置を勉強するということまで考えると、育鵬社は、とても丁寧書いてありますが、丁寧に書いてあることによって子どもたちの考える余地が狭まってしまうかもしれません。東京書籍のようにもれなく淡々と記載されている方が、子どもたちが自分たちの歴史として考える余地があるのではないかと考えると、東京書籍の扱いが魅力的だと思っています。特に、時代の終わりに、こんな学習をしたとまとめる部分、例えば、62ページにこの時代の歴史はこうでしたねという年表があり、先ほど伊藤委員がおっしゃっていた政治、経済、文化について、また、東アジアと欧米という形でかなり大きく分けていますが、世界の他の地域の歴史についても、このような勉強をしたとまとめる部分は良いと思います。また、63ページにあるように、小学校では、中世の日本について、このような勉強をしてきましたねということ扉で押さえておいて、その中世の勉強の終わった96ページではそれまでのページで学習したことについて、小学校での勉強がこんなにスキルアップしたということが確認できます。このように、自分たちで歴史の勉強についての足跡を確認しながら、学ぶことができることは、歴史の教科書らしい教科書だという印象を持っています。

佐野委員長

私は、歴史の教科書を研究する際に、構成というものを考えました。子どもたちが学びやすく、頭を整理して、理解できるのかということをもまず考え、それから内容を検討したのですが、皆さんが、内容について、いろいろお話されましたので、私は、構成についてお話ししたいと思います。まず、教科書の始めと終わりの部分です。教科書の始め方としては、育鵬社は、まず6ページにわたって国宝などの紹介をしています。東京書籍は2ページです。そういう意味では、教科書の初めの絵的なもの、国宝の描写については育鵬社の方が多いと思いました。東京書籍と帝国書院に関しましては、「身近な歴史調査」というところを最初に取り上げて、自分が住んでいる地域の歴史の調査をしようと提案して、レポートを作成するという身近なものから入っています。育鵬社は違っていて、「歴史ものさし」ということと小学校で学んだ偉人の振り返りのQ&Aのシートをつくってみようということから入っています。育鵬

社は、地域調査に関しての記述は少な目だと感じました。ですので、国宝の紹介に関しては育鵬社が圧倒的なのですが、地域の調査に関しては少ないようです。他の2者の方が多いと思いました。

教科書の終わりは、かなり特徴が違います。育鵬社の終わりは、歴史新聞「エルトゥール号」です。トルコの船を救済したという、この「エルトゥール号」を例にして、歴史新聞をつくってみようというところから始まって、自分が思う日本の歴史ベスト10、人物ベスト10を挙げてみようという締めくくりをつくっています。帝国書院と東京書籍は、基本的に、そのような歴史の取りまとめという形のページは設定されていないように思いました。

そういった意味では、全体を見て、ベスト10を挙げていくという育鵬社がまとめについては、歴史の調査研究の観点(1)内容の③の「多角的・多面的に考察し、表現する力を育てるための工夫」がされていると思います。

次に、章立てです。章立てに関しては、東京書籍は、先ほど橋本委員から説明があったように、継続年表で分かりやすくつながりを作っていますので、どこを学んだということが捉えやすい状態で、章始めをしています。帝国書院は、先ほども話題になりました「タイムトラベル」で、かなり緻密なイラストで描写しています。育鵬社は、「歴史ものさし」「歴史絵巻」から始まって、「タイムトラベル」と同じようなものなのですが、実際の美術品で「鳥の目」「虫の目」というものを挙げております。これは、「鳥の目」というのは、道路があって表示しているのですが、例えば、東京書籍の64ページから65ページを見てください。これは道なりになっている章の始まりです。育鵬社は66ページと67ページです。両社では力点が違うのですね。育鵬社の方は、人物や応仁の乱について書いてありますが、同じ中世でも、東京書籍の方は美術品や建物などを表現しています。美術品で、時代の流れを追うというのは、かなり難しい作業になるのではないかと、私個人的には思いました。応仁の乱があって、戦国大名が登場してという流れでの記述の方が、歴史絵巻を書いている部分では、育鵬社の方が分かりやすいと思いました。その次のページは、中世の世界、育鵬社の「虫の目」で見の中世ですが、これはまさに、現物の絵を持ってきて、調べてみようということです。これは帝国書院の「タイムトラベル」に相当する部分なと思いますが、実際の絵を持ってきていますので、見やすさには難点があるかと思いますが、美術的なところへのつながりが出てくるのではないかと感じました。

そして、本文とコラムですが、東京書籍と帝国書院は、多くの小さなコラムがあって、本文を読み進んでいく中で、小さなコラムで補足していくような形が多いと思いました。育鵬社に関しては、そのようなコラムもありますが、最後の方で大きなテーマで取り上げたものの方が多い

と思いましたが。授業をしていく中で、頭を整理する中で、どちらが正しいのかという判断も必要なのではないかと思いました。

個人的には、構成に関しましては、東京書籍と育鵬社が優れているように思います。育鵬社は、帝国書院の「タイムトラベル」を実際の絵画としたものを「虫の目」として、「鳥の目」では、東京書籍の道のり表示より、時代の流れを起した事柄から直感的に把握しやすいものとしていると思いました。

それから、内容に入りますが、人物の取り上げ方のことを皆さんも、お話しされました。私が見たのは、伊藤博文と渋沢栄一です。育鵬社の197ページ、東京書籍の172ページです。育鵬社の方が大きなページを使って、2人の人物を対比させたり、関わりを表現したりした表示が多いです。また、西郷隆盛と大久保利通に関しても、育鵬社が177ページで、共通点と対立という形で、生き様を表現している部分が多いです。その人と人との関連や、考え方によってどのようなことをしたのかとか、原因があって、それについてこのような考え方をしたから、こういうことをしたという因果関係を細かく説明しているように感じました。

もう一つ、私が少し気になったのは、東京書籍の234ページの最後の方で、松前藩とアイヌの人々のところなのですが、「倭人の商人たちは漁場の経営を行い、アイヌの人々を労働者として使うようになりました」とあります。この表現は端的で分かりやすいのですが、中学生が読む文章として、人が人を使うという表現がよいのだろうかと思いました。今の時代、中学生もいろんな社会問題を抱えています。このような表現がよいのでしょうか。「直接支配」という言葉もかなり使っています。それに対して、帝国書院は111ページに、同じように、松前藩のことが書いてありますが、ここでは「多くのアイヌの人々が働き手として駆り出されることとなりました。」と表現しています。それから、「公益の主導権を握るようになりました。」という表現です。「直接支配」という言葉ではなくて、「主導権を握る」としています。表現に関していうと、柔らかく表現しているのは、帝国書院の方だとも思います。先ほど、淡々と表現しているというお話もありましたが、東京書籍の方が言い切っているのですが、表現は厳しいものが多く、帝国書院の方が優しく、包んだような言い方をしています。それが、全ての文章と、この本文の中にも生きていたと思いました。

高野委員

今の教科書のまとめ方のところで、少し意見を申し上げます。委員長がおっしゃった、全体を見通して10大事件や人物ベスト10を考えることや歴史新聞を作ることは、とてもおもしろいと思うのですが、学習を深めるということから考えるといかがでしょうか。とても子どもの気持ちを引くと思うので、おもしろい試みだとは思いますが、表面を流れていくような気がして、もう少し、学習を深める工夫があったらよいので

はないかと思いました。

一方、帝国書院も、全体ではないのですが、各部の最後に、それぞれの時代の特色を説明しようというまとめがあります。例えば、84ページ、85ページは中世の特色を説明しようということで、練習問題のような書き方もされています。85ページの下の方に、重要な出来事は何かを話し合い、新聞記事をつくってみましょうとあり、そこに順番に、新聞記事をつくるまでのノウハウとありますが、どのように考えを進めていくかについて書いてあって、それがその部のまとめになっています。あるいは、192ページと193ページは近代前半のところのまとめですが、193ページの右の下に、「近代前半で最も活躍したと思う人物は誰かを話し合い、その人物に手紙を書いてみましょう。」とあり、手紙の見本が書かれています。このように子どもたちの関心を引きながら、なおかつ、どうすれば、学習が深まるのかということ意識しているまとめだと思います。私は、このような帝国書院のまとめの仕方は、とても良いのではないかと思いました。また、随所に「確認しよう」「説明しよう」というものが設けられています。例えば、89ページなのですが、本文から2つ書き出してみようというのが「確認しよう」で、「説明しよう」が、その理由を説明してみようというものです。「確認しよう」は、本文から書き出してみようという勉強の仕方を示していて、「説明しよう」は、全くフリーといいますが、何とかについて説明してみようというものです。このような二段階のまとめ方も随所に出ていて、子どもたちが勉強する上で、非常に手がかりになるのではないかと思いました。

伊藤委員

先ほど、東京書籍で、年表に今までに学んだことのまとめが書いてあって、次に勉強することの年表とつながっていて、これはとても使いやすいのではないかという御意見がありましたが、選定委員会でも、そのような御意見が多く出ていました。一見すると、私も、そのように思いましたが、よくよくこの年表を見ると、例えば、東京書籍の96ページの中世の日本のまとめの年表を見ると、中世と近世のところの境目の年表で、左側が中世、右側がこれから勉強する近世となっております。それに対して、帝国書院は、84ページから85ページに、その中世の特色のおさらいということで年表が載っています。東京書籍の年表は、かなり細かく小さな字で言葉が羅列されていて、頭がこれで整理されるのかといえば、されるのかもしれませんが、むしろ、帝国書院の年表の方が、カラーでアクセントがついていたり、帯がついていたりして、大事な情報はどれなのか、分かりやすいように思いました。年表としてどちらが見やすいのかですが、東京書籍の年表の方が、本当に子どもにとって、頭を整理することのできる分かりやすいものなのだろうかという思いがあります。

それから、帝国書院の「タイムトラベル」は、とてもインパクトの大

きなものですが、これは何のためのものなのか、私なりに考えると、やはり、歴史は庶民のため、先ほど高野委員がおっしゃったたくさんの人々の人生が詰まったものなのだよ、という目配りなのだろうと思います。それは、先ほど委員長がおっしゃった育鵬社についての御意見とも重なると思います。もちろん、東京書籍にも、庶民の生活などについて多くの記載がありますので、各者それぞれ、庶民の歴史は考えているのだと思います。ただ、この帝国書院の「タイムトラベル」の絵は、非常にインパクトがあって、子どもたちが、政治史だけでは、自分と遠い存在だと考えて、何か出来事があったということで終わってしまって、ただ、知識を学ぶだけになってしまうところがあると思いますが、庶民の歴史というところに引きつけて考えると、静岡市では500年前にどのような人が、どこでどのような生活をしていたのだろうというような、具体的なイメージづくりに役に立つヒントになるのではないかと思います。この絵は非常におもしろいと私は感じております。

佐野委員長 それでは、採決に移ります。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果が出たようですので、報告をお願いします。

教育局長 投票結果を報告させていただきます。東京書籍株式会社1票、株式会社帝国書院3票、株式会社育鵬社2票となっております。

佐野委員長 ただいまの投票の結果、過半数の票を得る教科書がなく、また、2者が半数ずつの票を得ることもなかったため、再度、投票を行う必要がありますが、今後の手続について、私から提案させていただきます。

再投票に先立ちまして、その対象となる教科書を2者に絞るための予備投票を行いたいと思います。その予備投票の方法について、協議をお願いいたします。まず、ただ今の投票で、1票も得ることがなかった教科書は、予備投票の対象から外すこととしてよろしいでしょうか。

各 委 員 承認

佐野委員長 続いて、予備投票の方法ですが、それぞれの委員が1位、2位の教科書を選んで投票します。そして、1位を2点、2位を1点として、それぞれの教科書の獲得点数を集計し、上位2者を再投票の対象とします。集計した結果、獲得点数が同じ教科書がある場合は、1位の獲得数が多いほうを上位とします。また、複数の者が同点で、1位、2位となり、上位2者を決定できない場合は、同点で1位、2位となった者を対象に、

再度、予備投票を行います。最終的に、2者が決定するまで、予備投票を行うことといたします。このような方法で、再投票の対象となる2者を決定することとして、よろしいでしょうか。

各 委 員 承認

佐野委員長 それでは、予備投票に移る前に、改めて御意見、御質問等ございましたら、お願いします。

特に無いようですので、予備投票に移ります。投票用紙を配付してください。

ただいま、投票用紙を配っておりますが、東京書籍株式会社、株式会社帝国書院、株式会社育鵬社、この3者について、1位、2位の記載を左側の枠にお願いします。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果が出たようですので、報告をお願いします。

教育局長 それでは、集計結果を報告させていただきます。

東京書籍株式会社4点、株式会社帝国書院9点、株式会社育鵬社5点となっております。

佐野委員長 予備投票により、株式会社帝国書院と株式会社育鵬社の2つの教科書に絞られましたので、この2つの教科書をもって、本採決を改めて行いたいと思います。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 それでは、結果の発表をお願いします。

教育局長 それでは、得票数を報告いたします。株式会社帝国書院4票、株式会社育鵬社2票となっております。

佐野委員長 それでは、歴史につきましては、株式会社帝国書院が過半数の4票を得ましたので、株式会社帝国書院を採択いたします。

続いては、公民です。

選定委員長 公民の採択対象教科書は7者です。協議の中心は、東京書籍、日本文教出版、帝国書院となりました。

東京書籍は、バランスがよく、インターネット、いじめ等、今日的

課題を取り上げている点が良いという意見が出されました。また、地理、歴史、公民を結びつけ、相互に関連した勉強ができることが評価されました。

日本文教出版は、現代史年表とCDPとのリンクがおもしろいことや、レポート作成について、課題設定からプレゼンまで丁寧に説明していることが評価されました。

帝国書院は、イラストが学ぶ意欲をかき立てることや、学習の前に政治と経済を結びつけるきっかけとなる情報提供をしていることが評価されました。

協議の結果、東京書籍、帝国書院の2者を建議しました。

高木教育長 公民は7者が採択対象教科書ということですが、2者が建議されました。私たちの世代では、社会は地理、歴史だけでしたが、公民としてどうあるべきか、人が生きていく中で、いろいろな権利や義務を生じるということの文章構成について、各者それぞれの提案がされていると思っています。

私は、全者を見た中で、建議されていませんが、教育出版社がとても心に残りました。教育出版社の冒頭、巻頭の3ページを開けてください。今、申し上げたとおり、公民という新しい分野について、3年生で習いますが、公民とは何ぞやという究極の問いについて、この教育出版社が、まさしく物語っているのではないかと、私は思っています。それは、その3ページにある、持続可能性を妨げる課題、要するに、持続可能性のある社会を作るということこそが、公民の一番の狙いではないかと、私は強く感じています。この教育出版社が、端的に、この持続可能性というものを大きく打ち出して、公民の学習は持続可能な未来を築いていくためのものですよ、という大きなテーマをうたっていることに、とても意味があると思っています。そのための柱立てとして、生命とは何か、平和とは何か、人権とは何か、豊かさとは何か、しあわせとは何か、文化の多様性とは何か、民主主義とは何か、安全とは何かという切り込みで論じています。この切り込みは、公正ですし、今後、21世紀から22世紀にかけて学んでいく子どもたちにとって、とても大切なテーマが端的に語られていると思います。ぜひ教育出版社も建議案と並べて検討したいという提案をしたいと思います。

伊澤委員 東京書籍と帝国書院の2者が建議されました。それぞれ、本当にバランスのよい教科書だと思います。いわゆる公民教育について、今後、どのように考えていくかという、今、教育長からのお話にあった、持続可能ということは、大きなテーマだと思います。

これまでの公民は、政治と経済の仕組みを学習する部分が大きかったと思います。今後、社会がグローバル化していく中では、いろんなこと

を考えなければならないと思います。政治や経済の仕組みを含め、教育長から話があった持続可能な社会を目指していくこと、また、地域の中で公共の意識をどのように持ち続けていくことができるのか、それを学び、育てるという方向を考えることが必要だと思います。私は、つながりのある歴史と同じように、育鵬社を考えてみたいと思いました。

育鵬社の教科書の巻頭に見開きで「人生のものさし」というものがあります。現在、自分たちは学校教育の時代にあり、学校を卒業すると、その次が社会人の時代になります。社会人になって、大人としての自覚を持ち、その後、親の世代になっていく、家族を持って、また、責任を持つような世代になっていくという、自分の将来を描いていくことのできる「人生のものさし」であると思っています。

そのように、家族をイメージしたときに、育鵬社の18ページには、「家族と郷土」というテーマがありますが、愛情と信頼で結ばれた家族、また、生まれ育った郷土を考えていく中で、郷土で、家族の中で、今後、自分も家族をつくっていく、郷土で生きていくという自覚が出てくるのではないのかと思います。静岡市も、少子化が進んでいますが、静岡市という郷土を意識して学ぶことによって、他の都市に行ったとしても、また、戻って来てくれるのではないかと思いますし、このような学習ができることは大事だと思います。

そのすぐ後の23ページには、「家族の生活史を調べる」というテーマがあります。自分の家族、親が、おじいさん、おばあさんが、どのような時代を、どのように生きてきたのかを調べ、その後、自分がそれを引き継いで、今後どのように生きていくのかという自分の将来を考えることができます。自分の家族の生活の歴史の中から、自分の将来を考えていくために、家族の歴史、生活史を調べるというのも、考えとしては良いのではないかと思います。

また、36ページですが、「身近な祭りを調べてみましょう」とあります。祭りというのは、必ず、どの地域にもあります。祭りというと、神社、仏閣の祭りというイメージが強いですが、必ずしもそのようなものではなくて、大きい小さいにかかわらず、自分の地元にある出来事やイベントを調べてみて、小さい頃、どのように参加していたのか、また、これから、自分がどのように関わっていくのかを考えることも、シチズンシップ教育などにつながっていくと思います。

最後に、人物の紹介ですが、140ページを見てください。先ほど、歴史の教科書の中で、渋沢栄一が紹介されていました。日本近代経済の父と呼ばれている渋沢栄一は、静岡市にも縁があって、明治維新の後、徳川慶喜と一緒に静岡でいろいろなことをされています。日本経済の近代経済について、いろいろな活躍をされた方ですが、140ページの一番下の表の渋沢栄一賞の受賞者の一例の中に、はごろも教育財団の創立者である後藤磯吉さんが載っています。このことも、とても良かったと思っ

ております。このようなことを含め、育鵬社の教科書を見させていただきました。

伊藤委員

今、伊澤委員がおっしゃったことは、まさに育鵬社の特徴であると思います。私も、育鵬社の教科書は、一通り見ましたし、建議されている東京書籍、帝国書院も見ました。そして、先ほど、教育長がおっしゃった教育出版についても、非常に心引かれるものがありましたので、その4者をそれぞれ見ました。

その中で、育鵬社の教科書は、他の3者とは違って、少し特徴的だと思いました。公民を学ぶときに、家族を学ぶことや地域を大事に思う気持ちを学ぶこと、あるいは、国家のことを考えることなど、そういう目線はもちろん大事だと思います。ただ、今の中学生の子どもたちのことを考えると、いじめなどいろいろな問題があります。今どきの子どもたちは、周りの目を非常に気にして、空気を読むとか、周りに合わせてしまうという風潮が、非常に大きいと思います。それで、自分が目立たないようにするとか、周りの中の一員になり切ってしまうという、目に見えない同調圧力のようなものの中で暮らしているのが、今の子どもたちではないかということは、いつも危惧しています。そうすると、あなたたち一人一人が周りと一緒になくてもいいんだよ、言いたいことを言ってもいいんだよ、自分の生き方を貫いてもいいんだよ、と伝えたいと思います。もちろん、何をしてもいいということでは決してありませんが、そういうメッセージも大事ではないかと思います。家族のことを強調したり、地域を強調したり、国家を強調するということはとても大事ですし、私自身も、とても大事なことだと思いますが、そういうメッセージがあまり強くなると、子ども心に、自分もそれに合わせなければいけないと思ってしまうのではないかということは、危惧されます。

そういう意味では、この教育出版の教科書は、「ともに生きる」というタイトルになっていて、あなたはあなた、私は私、いろいろな人がいても、みんなともに生きて、共生の概念でしょうか、そういう視点であるところが、育鵬社などと違うと思います。各論的には、中身はそんなに変わらないところもたくさんありますが、一人一人を大事にしよう、一人一人の権利についても、きちんと学びましょうという目線があって、あなたたち一人一人がどのように守られているのか、もちろん権利だけではなくて、自由には責任があるということも、この教育出版の教科書にはしっかりと書いてありますので、何でもしてもよいということにはなりません。そのようなメッセージがきちんと出されているのが、この教育出版だと思います。

それから、特に、経済のグローバル化と日本経済についてどのように取り上げられているかを確認しました。経済のグローバル化が進み、静岡市でも苦しい思いをしている企業はたくさんありますが、そのような

中で、グローバル化の話をどのように、それぞれの教科書が取り上げているのかを読み比べてみました。例えば、東京書籍は、156ページから157ページで、その問題を取り上げており、157ページの半ページほどを使って、「日本の貿易の変化」というテーマで、グローバル化に伴って、最終的に産業の空洞化に至っているということが、非常にざっくりした説明で書かれていました。帝国書院は、138ページから139ページに、「グローバル化と経済」というテーマがあり、138ページに、グローバル化についての理論的な説明と、産業が空洞化しているということが書かれていました。教育出版は、170ページから171ページのところで書かれており、経済のグローバル化の中でのテーマで、他の2者と比べて、非常に詳しく、分かりやすく書かれていると感じました。他方、育鵬社については、特にグローバル化と日本経済というタイトルではなく、155ページの「国際金融」という項目の中で、「為替相場」というところに書かれており、扱いが小さいと感じました。もちろん、このテーマだけが大事ということではありませんが、比較的、教育出版は、どの説明もこのように詳しいと思いました。

また、仕事の関係上、憲法についての記載は気になり、どの教科書もきちんと読みましたが、最もオーソドックスに定義からひもといて、説明しているのは教育出版ではないかと感じました。

それから、もう1点、教育出版で良いと思ったのは、子どもたちが議論するテーマが比較的分かりやすいことです。例えば、30ページに情報リテラシーって何だろうというテーマがあります。31ページまで続いて2ページで書かれていますが、31ページの右下に、クリティカル・シンキングについて記載されています。クリティカル・シンキングというのは、情報をうのみにしないで、少し批判的な目で見てみよう、書いてあることは本当のことだろうかという目で情報を見るようにしようということなのですが、その上に、そのことを気づかせてくれる写真が載っています。このクリティカル・シンキングという言葉自体を他の教科書で探しましたが、見つかりませんでした。このような新しい話題や子どもたちが身近で考えなければならない話題の取り上げ方も、教育出版は上手だと思いました。

橋本委員

公民ですので、公民的な資質の基礎を培うところが大きな部分で、もちろん、いろいろな社会との関係について学ぶということもありますが、自分は社会集団の中で生きているのだという中で、どのように社会を形成していくのかという視点が非常に大事だと思います。

東京書籍の24ページから、「現代社会の見方や考え方」というテーマで、身近なトラブルについて大きく取り上げています。漫画だからよいというわけではありませんが、まずは、家族の話題の中から、そして、次は、部活で使いたい敷地の部分について、どのような形で意見を出し

て、合意を求めていくかということが書かれています。そして、その次は、マンションの問題です。みんなで暮らしているときにどのように対応すべきか、自転車置き場というような自分の身の回りの問題について、効率と公正、合意を求めることなどを考えます。全体の中の自分ということについて身近に考える場を最初に大きく取り上げていることは、東京書籍の教科書の大きな魅力だと思いました。

高野委員

私は、静岡市の第2期教育振興基本計画の中に、「静岡市民を育てる」という一つの目標があること、また、シチズンシップ教育について考えなければならないということ、日頃から皆さんと話していましたので、地方自治についてはどのように書かれているのか、確認してみました。各社とも、書かれている内容は、それほど違いはないのですが、導入の部分が少し違うように思いました。教育出版は106ページの「身近な地域の政治」というところで、地域の課題と地方自治の仕組みについて書いています。その最初が、地域社会の今というもので、私たちは地域の中で暮らしている、自分たちの日常生活の基盤が地域社会である、その地域社会の課題を解決するために、地方自治、あるいは、地方公共団体の役割が必要だという流れの文章になっています。同じような書き方をしているのが、東京書籍です。東京書籍の102ページは、「地方自治とは」というタイトルから始まりますが、私たちは地域社会で暮らしており、その課題はいろいろで、それを解決していくためには、住民自治が必要だということから、地方公共団体、地方自治の話に入っています。これらに対して、帝国書院は、88ページにあるように「地方自治と地方公共団体」という地方公共団体の仕事から入って、民主政治を支える地方政治という流れになっています。もう一つ、育鵬社ですが、育鵬社は112ページで、帝国書院と少し似た入り方をしている、「地方公共団体の仕組み」というところから入っています。そんなに違いはないと言えば、違いはないのですが、身近な地域を考えたときに、地方自治、地方公共団体の必要性が分かってくるという流れがとても大事なのではないかと思います。そして、その節のまとめですが、それぞれの教科書でおもしろい試みをしています。例えば、教育出版の114ページでは、「まちづくりのアイデアを提言しよう」ということで、地域の課題を、情報を集めて、それをプレゼンテーションする、ポスターにまとめるということを最後のまとめにしています。それから、帝国書院は最後の96ページで、「自分が住むトライアル公民」、「自分が住むまちのまちづくりを考えよう」、「まちをよりよくするために」ということで、カードを使って、課題を解決するための方法や意見を整理して、優先順位を付けて、自分の住む町の良さを考えようという作業的なことが書かれていて、どのようにまちづくりに関わっていくのか、まちづくりへの参加についても書かれていて、大変おもしろいと思いました。育鵬社は、118

ページで、「観光資源を探そう」ということで、地域おこしについて話し合う、また、それについての作業を行うという形のまとめの仕方を行っています。それから、東京書籍は110ページ、「公民にチャレンジ 私たちの政治参加」ということで、これは福山市の町を具体的に挙げているのですが、地理と歴史を振り返って課題を調べ、いろいろな話を聞いて、自分たちにできることを考えていくことが、問題把握、問題分析、意思決定、提案参加というような形で、システムとして示されています。さらに、114ページでは「市長選挙に立候補しよう」というところまであって、子どもたちが楽しみながら学習できるのではないかと思います。

この地方自治は、先ほど申し上げた静岡市の市民を育てる、シチズンシップ教育というところに結びつくものですから、とても大事だと思いますが、自分たちの生活、地域の課題から地方自治を考えるという流れが、教育出版と東京書籍は、しっかり出来ているのではないかと思います。その中で、教育出版の最後のまちづくりのアイデア、提案、プレゼンという学習方法が、おもしろい試みだと思いました。

今、御説明しました4者の教科書について、どのような種類の資料をどのように使っているのかということを見てみました。例えば、先ほど、伊藤委員からお話があった「グローバル化と日本経済」というところです。東京書籍は156ページに、円安の影響で外国人客が増加したという新聞記事と貿易赤字の新聞記事、それから、タイにある日本の自動車メーカーの写真が載っています。教育出版は、郊外型の大型店舗の写真で、これは、安い品を世界中から集められるということで載っているのではないかと思います。それから、海外展開する日本企業とシャッター商店街の写真です。帝国書院は、U社で働く外国人スタッフの写真です。育鵬社は、154ページには、円相場と日経平均株価を示すモニターの写真ですが、その前のページに、外国人の観光客が増えたということで郷土観光の外国人、日本の町工場、開発中の小型ビジネスジェット、クールジャパンなどグローバル化の中で、日本の良さを海外にアピールすることができるという意味合いの写真がたくさん載っていました。

それから、教育出版のグラフがユニークだと思ったのですが、170ページとその右側の171ページの3つのグラフです。貿易収支と取得所得収支の推移、日本の製造業の海外生産比率と非正規雇用者の割合の推移、都道府県民所得の推移のグラフが載っています。その下のグローバル化の影響という文章で説明されているものをグラフに表している、あるいは、そのグラフから読み取って説明しているように思います。このように、資料の使い方が、非常に学習内容を深め、考えさせるものなのではないかと思います。資料の種類が多いのは東京書籍で、写真、新聞記事、図、グラフもいろいろな種類があり、新聞記事もよく活用されてい

ましたが、このグラフの使い方や影響を示す写真の使い方など、教育出版の資料の使い方は非常によく考えられているという感想を持ちました。

佐野委員長 私は、構成について調べましたので、報告します。構成、特に教科書の初めと終わりについてですが、結論から言うと、教育出版と育鵬社が凝っていると思いました。

教育出版では、最初の6ページから9ページで、公民にアプローチ、新聞を活用しようということで、新聞を取り上げて公民を学んでいこうという姿勢を出しています。公民という教科は、非常に新聞から得る情報が多いので、このようなアプローチは、非常に良いのではないかと思います。育鵬社は、先ほど、伊澤委員もおっしゃったように、なかなか工夫されていて、特に、3ページ目です。丸い絵で、地理、歴史、公民の概念図が載っています。また、私の過去、子孫、先祖、それから、家庭からだんだん、地域、郷土、日本、世界に広がっていくという中で、自分のこととして公民という科目を捉えていくというアプローチを考えていると思いました。教科書の始まりと終わりの部分は、この2者が特徴的であったと感じます。

教科書の終わりについては、ほとんどの教科書で、持続可能な社会をテーマとしていました。基本的には、持続可能な社会というテーマをどのようにまとめていくかなのですが、手法は違って、最もユニークなのは育鵬社でした。育鵬社は、自分が総理大臣になったらどうするかということについて、ウェビング・マップから言語活動につなげていくような形になっています。あくまで、自分が主体となって、責任ある社会づくりをするにはどのようにしたらよいのかを念頭に置いているような大胆な取り上げをしています。また、レポートを作ってみようということも書かれていたと思います。

章立てに関しては、入り方がおもしろかったのは東京書籍と育鵬社です。東京書籍は、スーパーやコンビニを最初に取り上げて、その商品の内容から公民の問題に発展していくような、自分の実際の生活から入っていきやすい内容となっていて、分かりやすいと感じました。育鵬社は、法の入り口、経済の入り口、政治の入り口、国際社会の入り口と生活に密着したテーマを掲げており、分かりやすい内容だと思いました。教科書によっては、いきなり章から始まっていくものもありますし、必要な投げかけがないものもありました。

コラムなどについては、先ほど、話がありましたが、個人的には、教育出版が一番すっきりして見やすいという印象を持ちました。その次が育鵬社で、東京書籍は細かく、いろいろな情報を提供していますので、分かりやすいのですが、目移りしやすいつくりになっているようにも感じました。

それから、新聞記事に関しての記載が、育鵬社と東京書籍は多かったと思います。新聞活用教育ということについては、最近、話題になっていますが、そういう意味では、育鵬社が非常に多くの新聞記事を載せていました。東京書籍も多く載せていますが、あまり載せていない教科書もありました。

そして、帝国書院と育鵬社は、ディベートという手法を取り上げています。

では、採決に移ります。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果の報告をお願いします。

教育局長 それでは、得票数を発表いたします。
東京書籍株式会社1票、教育出版株式会社3票、株式会社育鵬社2票となっております。

佐野委員長 ただいまの投票の結果、過半数の票を得る教科書がありませんでした。また、2者が半数ずつの票を得ることもなかったため、再度、投票を行う必要があります。先ほどと同じように、予備投票を行いたいと思いますが、いかがでしょうか。

各 委 員 承認

佐野委員長 それでは、1位、2位の教科書を選んで投票していただきますが、先ほどと同様に、今回の投票で1票も得ることのなかった教科書は、予備投票の対象から外してよいでしょうか。

各 委 員 承認

佐野委員長 それでは、予備投票の投票用紙を配付してください。委員の皆さんは、左欄に1位、2位を御記載ください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果の報告をお願いします。

教育局長 それでは、集計結果を発表いたします。東京書籍株式会社4点、教育出版株式会社9点、株式会社育鵬社5点となっております。

佐野委員長 2者に絞られましたが、1位が教育出版株式会社、2位が株式会社育鵬社でございます。この2者で本投票を実施することになりますが、御意見、御質問等はよろしいですか。
それでは、本投票を行いますので、投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果が出たようですので、報告をお願いします。

教育局長 得票数を発表いたします。教育出版株式会社4票、株式会社育鵬社2票となっております。

佐野委員長 公民につきましては、教育出版株式会社が過半数の4票を得ましたので、教育出版株式会社を採択いたします。
それでは、続きまして、地図に移ります。

選定委員長 地図の採択対象教科書は2者です。
帝国書院は、色づかい、地図の見せ方、一体感、目線の変化による見方などが良いことや、情報量が豊富であるという意見が多くありました。北方領土、竹島、尖閣諸島の写真を取り入れて説明してあることや、きれいで見やすいこと、富士山の写真があり、郷土愛が育つことなどといった意見も建議案を作成する上での大きなポイントとなりました。
東京書籍も、ジャンプマークということで、その資料に関連した他のページを示し、地図上に掲載されている複数の資料をそれぞれ関連付けながら活用する力を育むよう工夫されていましたが、総合的に見て、帝国書院の方が評価が高いという結論となりました。
協議の結果、帝国書院の1者を建議しました。

高木教育長 地図については採択対象教科書が2者ということで、その中で帝国書院1者が建議されました。私も、2者を改めて見ましたが、やはり、地図としての情報ですね。地域性、全体の中の位置付け、それから、立体的な構成、高低の分かる地図など全体的観点から優劣を付けるとなると、やはり、帝国書院の方に長けたものがあるように私は感じました。

佐野委員長 東京書籍について意見を申し上げたいと思います。地図に何を求めるか考えると、いかに早く、目的とするところを発見するかということだと思います。つまり、思考を分断しないで、集中力を保ちながら、その地図のあるべきところにつながるという意味では、東京書籍の方も検討する必要があると思います。東京書籍は、両ページに関東地方、関東地

方など端の方に書いてあります。これは、調べていて、ページを行き過ぎたときに戻るのに、とても便利でした。この両側に地方が書いてあるということ、また、東京書籍の177ページ、178ページには、事項別索引、資料索引があります。こちらの事項索引、資料索引も、索引の充実という意味では、東京書籍の方が上回っていました。また、東京書籍は、利き腕が違っても調べやすいという配慮もされているのではないかと思います。両側に地方が書いてあると、調べるのが簡単で楽です。

高木教育長 地図の中で、目的の場所を見つけることについて、委員長は、素早く見つけることができることが一つの利点だということをおっしゃいました。目的地を見つけるためには、いろいろな探し方があります。国から調べたり、Aの何番という緯線、経線から調べたりと、調べる方法には多様性があります。そして、目的の場所に至ったうれしさ、発見のうれしさがありますので、地図には、いろいろな見方、考え方あってもよいと感じます。

佐野委員長 他に御意見等が無いようでしたら、採決に移ってよろしいでしょうか。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果が出たようですので、報告をお願いします。

教育局長 得票数を発表いたします。東京書籍株式会社1票、株式会社帝国書院5票です。

佐野委員長 地図につきましては、株式会社帝国書院が過半数の5票を得ましたので、株式会社帝国書院を採択いたします。
それでは、続きまして、数学に移ります。

選定委員長 数学についてですが、採択対象教科書は7者です。協議の中心は、東京書籍、大日本図書、学校図書となりました。

東京書籍は、「もっと練習」「ちょっと確認」が、子どもにとって、使いやすい、身近な言葉などで子どもが抵抗感なく学習できるのではないか、などの意見が出されました。

大日本図書は、コラムを図形的に捉えていてイメージしやすいという意見や、表記の仕方がシンプルでトピックが良く、スモール・ステップで学習しやすいといった意見が出されました。

学校図書は、教科書全体が自学自習を意識してつくられていること、生徒が取捨選択して学ぶことができ、つまずいている子や目標を達成し

ている子のどちらにも配慮していることが挙げられました。また、各章の導入が、見開きページで分かりやすく説明されており、問題がまとめ、応用、活用と区別されていて、生徒が自分で学習しやすいのではといった意見が出されました。

協議の結果、東京書籍、学校図書の2者を建議しました。

高木教育長 数学の出版社は7者で、建議はそのうち2者ということですが、先日、理科の中でも話題になりましたが、数学にも啓林館は別冊が付いています。この別冊の扱いについて考えたいと思います。特に、現在、学力向上が大きくうたわれております。幸いにして、本市の中学校の数学は、比較的良好な結果を出していますが、これは、当然、教科書によるところが大きいと思いますが、さらなる学力の向上を目指すに当たって、この別冊の活用ということも考える必要があるのではないかと考えています。私個人としましては、建議の2者と併せて、啓林館についても考えていく必要があると考えています。

伊藤委員 教育長が啓林館についてお話されましたが、私も、いろいろな点で啓林館に引かれましたので、後ほど、少しお話ししたいと思います。

選定委員会を傍聴したときに、最終的には、東京書籍と学校図書の2つに絞られましたが、その議論の過程では、大日本図書を指示する御意見も多々ありましたので、私は、調査研究に当たっては、大日本図書も一生懸命読み、もちろん、他の教科書も一通り読みました。その結果、私としては、東京書籍、大日本図書、学校図書、啓林館の4者ほどに絞りましたので、その中で検討しました。

数学は、小学校6年生から中学1年生になり、算数から数学に替わるときに、難しくてわからなくなる、いわゆる中一ギャップが生じる恐れが高い科目だと思います。そこで、そのつながりをどうするのだろうという目線で見たとときに、とても良いと思ったのは、東京書籍でした。東京書籍の1年生の教科書の巻末228ページ以下に算数の振り返りということで、小学校6年生で学ぶ事項のまとめが載っていて、それが非常に良いと感じました。それから、先ほど、啓林館の教科書について、教育長から御発言がありましたが、もう一つ、小学校の振り返りがよくできると思ったのが、啓林館の別冊でした。啓林館の別冊では、それぞれの項目ごとに、単元ごとに分かりやすく、楽しみながら、振り返りができるようにつくられており、それも良いと感じました。

それから、数学は、家庭学習、復習もとても大事な科目ですので、家庭学習という観点から考えました。東京書籍も、啓林館も、大日本図書も、学校図書も、それぞれに章末、節末、あるいは巻末に、練習問題をたくさん用意していました。練習問題の量ということでは、どの者もそれぞれに工夫していて、甲乙つけがたいと思いましたが、改めて問題を

見る中で、やさしい問題から少し難しい問題まで、幅広い範囲で問題を用意しているのがどれかという目線で考えました。数学には個人差があって、数学が不得手な子もいるし、数学がとても得意で、よくできる子もいますので、ある程度、両方の子どもに対応できる教科書の方がよいだろうと思いました。そのような観点から考えると、啓林館の練習問題が、やさしい問題から難しい問題まで、最も広くカバーしていると感じました。そういう意味では、啓林館の教科書は良いと感じました。

また、見やすさについても考えました。見やすさについては、個人差があると思いますが、私は、啓林館の教科書が見やすいと感じました。数学的な定義の言葉、例えば、啓林館1年生の教科書38ページ、39ページを見ていただきたいのですが、逆数の定義、乗法の交換法則、乗法の結合法則という言葉の定義は、後ろが緑色になっています。また、40ページを見ていただくと、計算のテクニック、説明のところは後ろがブルーの背景になっています。他の教科書は、定義は特に色を塗らず、太字のゴシック体に強調した文字になっているだけでした。定義が緑色で探ることができる点は、啓林館と他の教科書の違うところでした。数学も、論理学なので、定義から考えるという思考方法は、とても大事ですので、定義を探しやすい教科書は見やすいと個人的には感じました。

伊澤委員

教育長からお話がありました啓林館の別冊の件です。以前は、別冊がいかにも別冊という感じだったと思いますが、この別冊は、教科書に収まるようになっていて、どこに別冊があるのだろうかというようになっていきます。

伊藤委員の御意見にあったように、どの教科書も、家庭学習をととても重く考えていることを感じます。数学の細かいテクニックについては、私は、よく分からない部分もあるのですが、家庭学習をととても大事にしていることを感じました。

啓林館の別冊をどのように捉えるのかですが、確か、昨年の小学校の教科書の採択の時に、子どもが別冊を忘れてしまうことも考えらえるという話を聞いたように思います。確かにそうだと感じたのですが、考えてみると、現在では、どの教科も副教材等が必要になっている部分があり、1冊の教科書の中だけで学習するのは難しい状況にあります。そうしますと、別冊があるのは、決して、マイナスではないと思いました。また、先ほど、お話した家庭学習をするにためにも、私は、別冊がとても良いと思いました。

高野委員

私は、1年生の教科書で、図形の導入のところを比較しました。私の捉え方が正しいかどうか分かりませんが、例えば、東京書籍の140ページです。平面図形の5章の最初ですが、図形の移動から入って、敷き詰め模様を作ってみようという、日本の伝統模様の麻の葉を、図形の移動

という視点で捉えて、そこから入っています。図形の移動から入って、142ページには回転移動や対称移動があって、151ページでは作図となっています。そして、160ページの3節で、おうぎ形と円となります。これを最初に見たときに、私は数学が苦手だからということもあるかもしれませんが、敷き詰め模様から入っていくことについて、子どもたちに、どのように説明されるのかが、良く分かりませんでした。それで、他の教科書の取り上げ方を見てみました。例えば、学校図書の162ページですが、平面図形で、最初に、「宝の隠し場所は」ということで、このページに書かれている3つの条件に当てはまる場所をどのように探したらよいかという問いかけがされています。そして、平面図形の基礎として、直線と角の説明から入って、それから、直線の位置関係、円、作図、そして、移動と続きます。そして、移動では、同じように麻の葉の模様が使われています。東京書籍と学校図書では、流れが少し違っていました。

先ほどから話題になっている啓林館は136ページです。ここも、学校図書と似ていて、直線図形と移動というところから入っています。「タイムカプセルを掘り出そう」というところから入って、次のページでは、直線と図形、さっき伊藤委員がおっしゃったように定義的ところが緑色で囲んであります。そして、143ページでは、図形の移動に入りますが、そこでは折り紙が使われて、その移動のことを説明するようになっています。それから、149ページでは作図で、「この開会式会場はどこだ」という問いかけから入っていきます。自然な流れだと思ったのは、学校図書と啓林館でした。特に啓林館については、最初の導入部の問いが非常に身近で、興味を引いて、なおかつ、難度が適切で、回数が多いと感じました。例えば、円のところ、155ページですが、3節の円とおうぎ形は、「班の当番表をつくろう」というところから始まっています。先ほどの開催式場の話や、図形の移動を折り紙で説明するというように、非常に身近なものを使って、とても上手に説明しているという印象を持ちました。さらに、例えば、136ページ、137ページですが、「タイムカプセルを掘り出そう」という問いに対して、その答えを考えて、自分の言葉で伝えようという言語活動につながる工夫がされているところもあります。また、155ページのように「みんなで話し合ってみよう」という投げかけもあるなどして、導入部の工夫が言語活動にまで広がっていて、なおかつ、適切な問いを投げかけていると、啓林館については感じました。

佐野委員長 数学ですが、理数離れということで、小学校から中学に上がるときに、一気に数学が苦手になってしまう子どもが非常に多いという話を聞いています。

今、お話のあった4者の教科書は、レベル的に、設問、問題を与える

と言う意味では、啓林館が高度な問題、難し目の問題が載っていて、高く伸びようとする子には、非常に良いものだと思いますが、それを下支えするものは何か考えると、あまり理解が進まない子を、いかに数学を苦手にさせないかということが必要だと思います。これについても、啓林館の別冊が小学校の振り返りに特化して、下支えも意識していると思います。我々が公教育を考える場合は、幅広い生徒たちを伸ばしていく、それから、支えていくことを考えなければいけませんので、そのことについて非常に工夫された教科書だと感じました。

他に御意見が無いようでしたら、採決に移ります。投票用紙を配付してください。

《投票用紙配布・投票用紙記入・投票（投票箱持ち回り）・開票》

佐野委員長 開票結果の報告をお願いします。

教育局長 それでは、得票数を発表いたします。東京書籍株式会社1票、株式会社新興出版社啓林館5票となっております。

佐野委員長 それでは、数学につきましては、株式会社新興出版社啓林館が過半数の5票を得ましたので、採択します。以上で、議案第18号の審議を終了します。

〈議案第19号 平成28年度使用静岡市立の高等学校用教科用図書の採択について〉

教育総務課長 議案説明

伊澤委員 確認させていただきたいのですが、各学校で使用する教科書の採択案は、校長の希望に基づいているということでしょうか。

教育総務課長 そうです。

佐野委員長 本件は、原案どおり議決してよろしいでしょうか。

各 委 員 承認

〈報告第3号 静岡市立小学校及び中学校の通学区域の変更に関する諮問について〉

学事課長 報告

伊藤委員 このように自治会の区域と学区が食い違っているところは、他にもあ

ると思います。この地区も以前からそうだったと思うのですが、今の時期に要望があったというのは、何か理由があるのでしょうか。私も、学区と自治会の区域は一致している方が分かりやすいと思います。きっかけや理由などがあつたら、教えてください。

学事課長 詳細は分かりませんが、手越原の自治会長からお話がありました。今回、学区を変更するのは手越原自治会の区域の一部ですが、そこには児童が1名住んでいます。その児童は、他の手越原の自治会の児童が通う長田北小学校・長田西中学校学区に通うために、区域指定校を変更している状況です。

そして、来年4月から、今回学区を変更する区域の子が一人、新一年生となります。この答申を経て、平成28年4月から学区が変更されますので、この児童は、長田北小学校へ通学することとなります。

各 委 員 了承

<報告第4号 全国学力・学習状況調査の結果等の公表について>

佐野委員長 続きまして、報告第4号全国学力・学習状況調査の結果等の公表について、事務局から御説明をお願いします。

学校教育課長 報告

佐野委員長 昨年度からの変更点は何かありますか。

学校教育課長 特にありません。

各 委 員 了承

(5) 閉会

佐野委員長 以上をもちまして、平成27年7月静岡市教育委員会定例会2日目を閉会とします。

午後5時37分